

第6回 魅力ある府立高校づくり懇話会 (概要)

1 日 時

令和5年3月20日(月) 午後1時～2時30分

2 場 所

京都産業大学むすびわざ館 3-A (3階)

3 出席者

- 委員 8名(欠席4名)
- 教育委員会 前川教育長、木上教育次長、村山教育監、大路管理部長、吉村指導部長、村田指導部理事、相馬高校改革推進室長、石澤総務企画課長、片又高校改革推進室参事 他

4 概 要

- 事務局からの説明
- 意見交換

■事務局からの説明

■意見交換(主な意見)

◆：座長 ○：委員 □：教育委員会

- ◆まず、前回に引き続き、地域の実情等を踏まえた府立高校の在り方という論点で、意見をいただきたい。
- 探究的な学びを深めていくことが重要である。小・中学校においても、総合的な学習の時間を中心に、教科も含めて探究学習を推進している。小・中学校での学びをいかに高校へ繋げていくかが求められている。京丹後市では、小・中学校に配置している地域学校協働本部のコーディネーターと、高校に配置している地域おこし協力隊の地域コーディネーターとの合同の会議が立ち上がった。探究的な学びをどのように高校へ繋げていくのかといった議論をしている。小・中学校から切れ目なく高校まで繋いで、本当に身につけるべき力をつけさせていくことが、府立高校の在り方においても大切なポイントである。
- 各地域の実情においては、小・中学校では今、特別支援学級が増加しており、様々な子どもたちが在籍している。また、高校では通学が不便な地域も存在し、通信制課程を希望する生徒が増えている。しかし、高校というものが、子どもたちにとっての居場所となり、集まることでしかできない学びや、集まることでしか触れ合えない温もりを感じられるような場所であるべきだと思う。
- 生徒や保護者にとって、空調やトイレなど、学校の施設設備が整っていることは、本当に大事

な要素である。また、スマホの持ち込みの可否などについても、学校選択の視点の1つになってくる。様々な懸念もあるが、多様な子どもたちを認め、信頼することも、大切な要素なのではないか。

- 南部地域では、学校の選択肢が多いからこそ、それぞれの生徒のニーズに合った特色という視点で、学校を選べることが望ましい。
- 生徒たちは、新しくきれいに整備された学校に魅力を感じるものなので、そのような学校が人気となり、志願倍率が高くなる傾向がある。トイレのきれいさ、空調が十分に整備されているかなどは、重要な視点である。空調の調子が悪い府立高校があるといった話も聞くので、予算の課題等もあると思うが、施設設備についてもしっかりと行き届くようにすることが必要である。
- 入学者選抜の方法が、中学生や保護者にはわかりにくい。一度経験してやっと理解できるといった思いを持つ保護者が多い。取りこぼさない視点は大事だが、もう少しわかりやすくすることが必要ではないか。また、中学校によって内申点の基準が全然違うような印象もある。在籍中学によって、全体的な内申点が異なるといったこともあり得るので、入試における報告書の取り扱いなども含めて検討する必要があるのではないか。
- 前回会議で議論された、国内留学のような形については、北部地域でモデルがつけられる可能性を感じた。
- 中学生には、将来への夢や希望を持って次のステップに進んでほしいと考える。どうすれば生徒たちが夢や希望を持てるかという視点の1つが、学習内容の専門性、学校の施設や環境、規模といった、様々な要素でのグレードアップ感ということになる。中学校よりも大きな規模があるか、学習内容や学習を進めていくための環境がより整っているか、高校で学んだ3年後がどんなステップへの入り口になっているか、高いレベルで切磋琢磨できる部活動があるかなどの要素が、高等学校には求められている。
- 様々な事情や状況によって、不登校など、学校に通いにくかった子どもたちもいる。そうした子どもたちにとっての将来の夢や希望には、高校卒業資格をちゃんと取りたい、もう一度学び直したいということもあると思う。全ての高校ではなくても、一部の学校や課程などの中で、中学校で十分に自分の思い通りの学習ができなかった子どもたちが、学び直しも含めてしっかりと力がつけられる柔軟性のある教育課程が提供されることが望ましい。
- 中学生の高校に対するニーズは、多様化しているというよりも、学習面に重点が移ってきていると思う。かつては、高校において部活動でインターハイを目指したいという子どもたちも多かったが、近年はそうしたニーズは限られてきている印象である。
- ◆それぞれの高校ごとに、どのようなスクール・ミッションを設定していて、どのような学校で

あるかを、中学生と保護者にアピールしていく必要がある。そこから中学生自身が、自分に合ったものは何かという学校選択ができることが重要である。

- 同じ普通科であっても学校の雰囲気は違うということは、高校に入学した生徒の話を聞くとわかるが、入学前の中学生には同じように見えている。交通網が発達している南部地域では、近くの学校を選択する必要はなく、生徒自身の思いにふれた学校が選択されていると思う。
- 京都府は南北に長く、地域の実情が異なる。北部地域は生徒数が極端に減ってきており、学校間の距離もかなりあるが、南部地域は私学も含めて高校の数が多いという実情がある。そのため、南部地域では、1校に1つの役割があることで、中学生にとってもわかりやすい選択肢になることが望ましいと思う。高校教育の中において、探究的な学びを深めること、多様化への対応、オンライン活用といった取組は、積極的に取り入れていくべきである。
- 生徒同士によるパッション、刺激が共有できるという視点では、やはり一定の学校規模があることが一番重要であると思う。オンライン活用も含めて、生徒の多様化への対応に特化した学校が一部ではあってもよいと思うが、南部地域でのベーシックな学校の在り方としては、一定の規模があって、役割を1つ持っていることが望ましい。
- 京都府内の人口の半分以上が、京都市内に集まっている一方で、丹後地域では中3生数が既に1000人を切っているなど、状況が全く違う。南部地域では交通の便がよいので、専門店のような特化した高校を選ぶことが可能であるが、北部地域では地域に1つしかない高校が専門化してしまうと、何十キロも遠く離れた高校を検討しなければならない。北部地域では、総合デパートのような学校でないと、多様な生徒を受け入れることが難しい。
- 前回会議で、小規模になることを逆手にとった検討をしてはどうかという意見があった。北部地域では、例えば空港のハブのような、拠点ハブ校をイメージしてはどうか。それに何校かが繋がっていて、週に3日間はオンラインで授業を受け、2日間はハブ校に通学して合同で行事や授業を行うというような方法を考えても良いのでは。
- ◆地域の実情が南部と北部で大きく異なることを、念頭に置く必要がある。教育の手法を考えることで、学校の適正な規模や教育内容の質を落とさずに柔軟に対応することができるのではなか。地域実情に照らしたよりよい方法を考える必要がある。また、通信制や定時制も含めると、学び方の多様性においてさらに多くの組み合わせがあり、そうした魅力づくりが必要である。
- ハブ的な高校の在り方については、同感である。合わせて、様々なタイプの学校が必要だと考える。ハブとした上で、集団としての規模がある程度大きな学校も必要だが、中学校において苦戦した子どもたちなど、小さい集団の中での学びが望ましい生徒もおり、両方の必要性がある。

- 中学校において苦戦している子どもたちにとっては、中学校の卒業時に次の「行き先」があって、所属感を持てるということが非常に大事である。高等学校には本来の枠組みがあるが、これからはその枠組みに対する柔軟性がキーワードになると思う。簡単ではないだろうが、学科間の連携や、通学もできる通信など、いろいろな発想がある。高校を中途退学してしまい行き先がない、学び続けることができないということは、子どもたちにとっては非常に厳しいことである。学び続けられるような教育のシステム、相談に対応する教育支援センターのような方策が必要になってくる。不登校の生徒に限らず、様々な学科の子どもたちが集い、困ったときには相談できる広場のような考え方が、非常に有効ではないか。今後は既存の枠組みの柔軟化に加えて、枠を超える可能性も考えていくことが必要ではないか。
- 高校の魅力づくりと地域との連携という視点では、地域のボランティアの方々を巻き込んでいくことや、職業学科において地域企業の最前線で働く方々のノウハウを吸収することが考えられる。そうした取組は高校側だけで進めることは難しいので、京丹後市では、子どもたちが自由に集えて地域のいろいろな人と繋がり合える場所を、府立高校の近くにつくっている。そうした取組は、他の地域でも検討していけるのではないか。また、そうした地域との繋がりをカリキュラムや学びの中心に置いた普通科のクラスやコースをつくることも、大変重要だと考える。
- 私立と公立の高校との違いで言うと、教員の人事異動の有無がある。魅力的な教員が見つかったとしても、公立は異動があるということで進学をためらい、私立を選ぶということもあるようだ。それならば、優秀で魅力的な教員の授業がオンラインで受けられるなど、ハブ校のように教員が複数の学校を股にかけるという発想もできるのではないか。公立高校としてのネットワークが、府立高校の強みになると思う。
- ◆府立高校の魅力化について議論をしているが、これから先は、私立や京都市立の高校も含めて、しっかりと議論をしていかないといけない。今後の中学生全体の進路保障を考えるには、入試制度も含めて公立・私立での議論が必要である。
- 府立高校が持つ根底的なミッションは、生徒たちが現代社会で生きる力を身につけさせるための場を提供することだと考える。その5つの力は、他人と関わり共に活動する力、自分の生活管理をする力、将来の夢と目標を描く力、職業と資格などの学習領域の関係に関する知識、自分で学び続ける力である。
- 中学校レベルまでの基礎的学力を復習する場の提供については、全ての府立高校に求められている。また、大学以上の高等教育において、どのような内容をどのような形態で学ぶのかということ、生徒が早い段階でイメージできるようにすることが望ましい。
- 府内の中学生に対して、府立高校の運営ポリシーや各校のスクール・ミッションをアピールすることが大事なので、ポリシーやミッションは誰にでも理解しやすいシンプルな軸を提示することが望ましい。

- 地域差が生じにくいようにするためにも、最先端のICT活用を進めるべきである。また、全日制であっても、通信制の履修システムを一部取り入れて、一定の日数を通学できなくても単位取得が可能とすることが望ましい。
- 急激な社会の変化によって、普通が普通でなくなっており、学校の当たり前と、社会の当たり前や子どもたちのニーズとのずれが急速に広がっている。そのため、フレックス学園構想や職業学科で大事にしてきた視点を、全日制や普通科の高校が学んで、そのエッセンスを実装していくことが重要である。
- 多様な生徒のニーズを包摂するようなカリキュラムや学習形態、学習集団、生活空間の柔軟性を、全課程において追求していく必要がある。また、社会の繋がりや関連性を欠いて、生徒1人1人に社会の中での自己の在り方や生き方を見つめる機会を現状十分に保障できていない、多くの高等学校のカリキュラムの在り方を、再考する必要があるのではないかと。キャリア教育的な意味においても、総合的な探究の時間や課題研究を、社会との繋がりを意識しながら充実させていくことが重要である。また、高校生や教員が社会のリアルを学ぶ機会に、保護者や地域住民を巻き込んでいくような展開も重要なのではないかと。
- 高校の種別やコースを分節化していくよりも、大きなくくりを維持し、むしろカリキュラムの中身で特色を出すことが重要なのではないかと。中学生にとって、これ以上入試システム等を複雑化することは、かえって形式的な選択に繋がりがかねないと思う。
- 府立高校としての共通のコンテンツを利用できるようにしたり、普通科と職業学科の交流、職業学科間の横断的な交流やプロジェクトを実施したりするなど、府立高校を1つの学習集団やコンソーシアムのような形で繋いでいくことも有効ではないかと。また、北部地域などは、他の類似の条件の都道府県の高校等との交流や連携も考えるとよいのではないかと。
- 特色化・魅力化、再編・存続の判断、さらには入試制度についての検討は、府立高校のみならず、市立高校・私立高校も含めた、設置者全体で進めていく必要がある。
- ◆スクール・ミッションを、各校の魅力づくりのためにどのように策定していくのか。高校が社会とどのように連携していくのかを、カリキュラムで示していくことが重要である。
- ◆SSHなどの学校が、レベルが同じような学校と横に学際的な交流をすることは重要だが、一方で、様々な分野の職業学科の専門性を持った生徒たちとの交流関係を構築することも有効である。そうした横断的なプロジェクト、または府県を越えたプロジェクトを模索していくことが、弾力的なカリキュラムの運用や、魅力ある高校づくりに繋がっていく。
- 幼児教育の重要性が提起され、幼・小・中・高・大と、教育をどう積み重ねていくかを考えるべき局面に来ている。全ての子どもたちは、本来ポジティブに生きようとしているはずであり、学校での教員の役割には生きていくことのサポートもあると考える。現代社会を生きてい

くには予測困難な状況等もあるが、子どもたちの生きる力を信じることが大事である。一緒に悩んだり一緒に協力したりできることは、人間性の基盤となるものだと思う。子どもたちが、しなやかに柔軟に、分かち合いながら生きていくための環境を整えていくことが、教育の役割ではないか。

- 府立高校の施設設備に関しては、例えば、寮が整備されていることや、現代ではWi-Fi環境が整っていることなどが重要で、魅力づくりに繋がる要素である。
- 高校は、生徒同士で共同作業をする最後の場所である。大学ではそれぞれ自分自身で学んでいくスタイルになり、友人関係なども限定的なものとなる。高校が、社会的な自立への指導・支援を行う場であることが望まれる。
- 高校へ通えなくなって、退学という選択に至ったという話を聞く。そうした生徒・保護者にとっては、柔軟に単位を取得し、卒業していけるような仕組みが望まれる。
- 施設設備については、生徒用個人ロッカーの設置についてのニーズもあると思う。高校生になると、毎日非常に多くの荷物を持って通学することになる。下駄箱に教科書を入れている生徒もいるようにも聞く。様々な問題はあるかもしれないが、学校設備の配慮についても検討していただきたい。
- 個別最適な学びと協働的な学びの両立をどう実現していくのかが問われている。発達面での特性がある生徒にとっての個別最適な学びの場の在り方として、自分の個性や良さが生かせる学校という視点が重要ではないか。現在の高校入試制度では、いくつかの教科の合計得点等をもとに合否が決まる仕組みであり、発達面での特性のある子どもたちもその枠組みの中で入学する学校が決まっていく。しかし、1つのことに非常に秀でたものがあるという子どもたちもあり、それぞれの特性や良さを生かして選べるような入試制度などがあれば、魅力ある学校への入学について、子どもたちの意欲が向上するのではないか。また、そうした高校入試の在り方を、生徒や保護者に示していくことも重要である。
- ◆全ての子どもたちに全ての科目の試験を実施するという方法が本当によいのかという議論は、他府県でも始まっている。科目を選べたり、学力検査とは違う部分にウェイトを置いたりといった入試の仕組みも考えられる。高校生の多様性と高等学校の多様性を、入試の在り方によって紐付けることも重要である。
- 国際こども平和賞を日本人で初めて受賞した川崎氏が、インタビューの中で、学校の外のアイディアも含めて子どもたちの話を聞いて、それを実現する場を一緒につくっていくことが、子どもたちのウェルビーイングに繋がっていくという旨を語られていた。子どもたちファーストとは、こうした考え方によるのではないか。個別最適化や、柔軟性のある枠組み、枠を超えていく可能性なども、そこに繋がっていくと思う。

- 枠組みの柔軟性は、それを運用する高校の教員自身が柔軟に考えられるかどうかにかかっている。これまでの高校は、入学後もしも続かなくなってしまうと進路変更を検討しないといけないう枠組みであると思うが、柔軟にやっていける可能性を共有していく必要がある。ハード面と、学校自体の考え方、教員の考え方という意味でのソフト面の両方から構築していかないと、実現しないと思う。
- 中学校の教育現場では、「誰1人見捨てない」というのが1つの合言葉である。進路指導においては、「あの高校へ行けば、本当に丁寧に卒業まで責任持って指導してもらえる」という観点がある。中学校としては、責任を持って勧められる高校が各地域において増えてほしい。
- スクール・ミッションが策定され、次にスクール・ポリシーをつくるという流れになるが、高校の教員が、本当に肝に銘じて日頃の教育活動で実践できるかが、非常に大事だと思う。例えば、世の中が不景気の中でも、本当に丁寧なサービスを提供できるお店は料金が高くても生き残っていけるのと同じで、そういうブランド力が学校教育にも求められる時代になってきている。
- 高校生には、自分の学校の「のれん」を大切にしてほしいと思っている。矜持、プライド、ブランド、誇り、伝統、看板など、様々な言葉で表現されるが、看板だとメッセージ的に外向きな感じがするし、誇りなどでは抽象的すぎる。「のれん」は、外から見てどういう屋号かわかるものであると同時に、内向きのベクトルが非常に強い言葉である。過去から受け継がれて未来に繋いでいくという、自分たちのもののように自分たちのものでないというものを、高校生たちに繋いでほしい。学校の本当の魅力とは、全体でつくっていくものなのではないだろうか。
- 夜間定時制に通う生徒にとっては、生活のリズムをつくって高校卒業の資格を取ることと、高校卒業後に向けた社会性を身につけることが、大きな目標だと思う。ここでの社会性とは、人と繋がる力も含めて、自分で生きていける力といった要素である。同じ高校生においても、生徒によって目標は全然違ってくる。小規模の中で丁寧にということも必要だが、定時制においても一定の集団規模が必要になってくる。
- 教育を進めるには、どうしても財政負担が必要となる。今後高校再編を進めていく上で大事なことは、選択と集中だと考えている。一定程度選択して集中投資をしないと、よりよい教育を進められない。
- 例えば、単位認定が他校と共有して実施できる、ハブ校のような形で、週2日はオンライン、3日は集まって授業や学校行事を行うなど、今までのフレームを一旦取り外す考え方が非常に重要ではないかと考える。ARやVRで様々な体験ができる時代になっており、授業についても変わっていくと考える。
- 生徒たちの成長においては、学校の外と繋がるということが非常に大切である。京丹後市の取

組のように、市の職員が高校と繋がって常に現場に存在するというのは、非常によい取組だ。そうしたコーディネーターが、生徒たちに本物に触れられる機会をつくってくれる。「場に立つ」ということは、生徒たちの成長にとって非常に大きな要素である。

- A I が急速に発達している。人間が勝負できる場所は、感性だと考えている。そういった意味では、芸術を大切にしていけないといけない。プロダクトデザインに取り組む学校や、デジタルアーツに取り組む学校があってもよい。人間の感性を磨くような視点が、もっと必要ではないだろうか。そのことに特別に取り組む学校だけではなく、学校教育全体の中でそうした要素を大切にすることが、重要だと考えている。
- ◆最近の高校生の特徴として、画一でなくなってきた、非常に個性豊かになってきたということがある。大きな学校を望む子どもたちもいれば、小さな空間の方が自分には合っていると考える子どもたちもいる。また、勉強が自分の売りだと思っている子どもたち、部活動やボランティアが自分の売りだと思っている子どもたちなど、様々なタイプがいる。自分自身の売りというものを、それぞれが考える時代である。
- ◆生徒急減期における魅力化では、高校を再編する必要もある。高校生の発達段階において、切磋琢磨することは必要で、一定の規模感がなければ、自己成長が望めない。したがって、一定の規模を下回る学校についての議論は避けられない。その際に重要なのは、府内の地域性を考慮することである。また、カリキュラムの柔軟性をもって対応していく手法も、非常に重要である。今後の魅力化の視点として、より柔軟な教育制度、教育システム、教育カリキュラムをどのように検討していくか。全日制・定時制・通信制といった課程を越えた組み合わせによる柔軟性も考えられる。
- ◆今後のキーワードになってくるのは「地域」である。地域課題への取組を、高校でどのように展開するか。現在、地域課題に取り組んで成功している高校もある。そういった事例が、地元の新聞などで報道されると、生徒たちの自尊感情が高まっていくことになる。自分たちが取り組んでいる学びが地域のためになっていると実感できることは、非常に重要である。加えて、SDGsなどの広い社会課題として展開していくことで、高校生がその後の人生を考えるときに自走できる感覚が育つことになる。地域の課題を1つの題材にしながらも、社会的な課題へと展開していく視点が必要である。
- ◆府立高校の魅力づくりや再編の検討過程においては、まずスクール・ミッションとスクール・ポリシーをしっかりと策定しないといけない。今回の懇話会においては、難関大学を受験するにふさわしいカリキュラムを用意した学校、部活動ではどこにも負けない学校、キャリア教育・職業教育に特化した学校、多様な支援を必要とする子どもたちに対応できるカリキュラムを備えた学校など、様々な発想が地域特性も踏まえて議論された。今後、生徒ファーストでの魅力づくりが求められる。